

## 安藤昌益と千住宿の関係を調べる会（佐藤元菘日記解説班）編 『佐藤元菘日記』

「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会」（以下「調べる会」）から、このたび『佐藤元菘日記』が刊行された。安藤昌益（1703～1762）は『自然真営道』『統道真伝』等を著した江戸中期の特色ある思想家として知られるが、秋田大館の出身で、京都の味岡三伯に医学を学び、八戸などで医業を営んでいた人物である。「調べる会」事務局長の矢内信吾氏の「あとがき」によれば、同会は安藤昌益の農本主義思想を最初に紹介した狩野亨吉（1865～1942、教育者、一高校長、京都帝大文科大学長）が「自然真営道の原稿を持運えた人は北千住町の橋本律蔵」であると記していることから、安藤昌益と千住宿の関心に興味を持った千住在住の有志者が中心となって2004年に発足した研究会である。

「調べる会」では、調査研究の手を広げる方法として、千住と縁の深い森鷗外（1862～1922、陸軍軍医／小説家）・内田銀蔵（1872～1919、日本近世史／京都帝大教授）・河井栄治郎（1891～1944、社会経済学／東京帝大教授）の顕彰と研究に着手し、京都大学文学部図書館に所蔵される内田銀蔵文庫の未公開資料のなかから『自然真営道』を伝えた橋本家の人々に関する資料を多数発見した（2006・2007年の調査）。続いて、医学生時代の森鷗外と千住を結ぶ人物として漢方医佐藤元菘に注目し、沼津市在住の元菘の子孫を探し当て、佐藤元菘日記に辿り着いた（2009年）。日記には安藤昌益への直接的な言及はなかったものの、予想通り元菘と橋本家には密接な交渉があることが分かった。本書によって、千住宿と安藤昌益の関心に止まらず、幕末の医学史・政治史・森鷗外研究など、さまざまな研究の視野が広がった。地元有志ならではの活動が見事なクリーンヒットにつながった。

佐藤元菘（1818～1897、名賜、別号応渠）について簡単に紹介しておこう。会津藩士の家に生まれ、藩の医学校を経て、江戸に出て多紀元堅

（1795～1857、別号菴庭、楽真院法印）の存誠塾に入門し（門人録『存誠菴室弟子記』に天保14年3月17日の入門記録あり、『漢方の臨床』50-3・4参照）、その塾頭を勤めた。儒学は多紀家と近い海保漁村や郡山出身の安積良斎等に学んだ。また嘉永年間には帰郷して会津藩領で牛痘普及に努めた。そして、渋江抽斎（1805～1858）が安政5年8月29日にコレラで亡くなった後、同年より江戸医学館の講師に任じられ、『医心方』校刻事業の校正にも携わり、医学館における講書実績によって文久3年（1863）に將軍御目見を許された。明治以降は退隠し、以前から関係の深かった千住で学問を教え、東京医学校・東大医学部の医学生時代の森鷗外に漢詩や漢方医書を教えた。その後、茨城県下妻の温知病院長となり、漢方存続運動にも尽力した。

子孫のもとに現存する佐藤元菘日記は以下の8冊であり、本書にはこれが全て収録されている。

- ①漫遊日記 嘉永4年（1851）2月16日～同年（1852）8月21日
- ②糜廩録三 嘉永5年（1852）8月22日～同年（1853）正月11日
- ③起居注（一） 嘉永7年（1854）2月29日～安政2年（1855）12月12日
- ④起居注（二） 文久3年（1863）正月1日～元治元年（1864）10月29日
- ⑤起居注（三） 元治元年（1864）11月1日～慶応2年（1866）7月10日
- ⑥伴鶯日記一 慶応4年（1868）2月28日～明治元年（1868）12月27日
- ⑦伴鶯日記二 明治2年（1869）正月1日～同3年（1870）8月14日
- ⑧伴鶯日記三 明治3年（1870）8月15日～同4年（1871）11月21日

一通り翻阅した感想を記してみよう。江戸医学館とその周辺の考証学者に関心のある筆者から見ると、③「起居注（一）」・④「起居注（二）」・⑤

「起居注（三）」に最も興味を惹かれた。

①「漫遊日記」では、存誠塾の後輩にあたる長崎の岡田恒庵（篁所）との書簡の往復が目を惹き、医者では堀川舟庵・県玄節（士善）の名が散見し、儒者では安積良斎や南摩綱紀の名が見える。

②「糜廩録 三」では、塩田順庵や堀川舟庵・県玄節ら存誠塾門人との交流が多いが、勤王僧黙霖や同郷の儒者添川廉斎の名も見える。

③「起居注（一）」では、時節柄、外夷に関する記事も見えるが、しばしば多紀元堅・安積良斎・添川廉斎を訪問し、存誠塾において元堅の指示によって多紀元簡の遺稿『櫟窓類抄』の校正作業を継続し、また『医心方』の影写（嘉永7年11月1日開始）にも従事している。

④「起居注（二）」では、文久3年正月23日に江戸医学館に倣い元菫が祭酒となって芝・会津藩邸内の医学寮で神農祭が執行されたこと、2月2日には登城して幕府から將軍御目見を拜命したこと、2月12日には城官寺で行われた多紀元堅の七回忌法要に出席したこと、12月28日には幕府から月並拜礼（月例登城）を拜命したこと、元治元年4月15日には森立之と一緒に王子辺で採葉を行ったことなどが見える。そして、元治元年の4月11日から10月21日まで、1と6の日に計20回「医庠」（医学館の意）の記載があり、医学館（陪臣町医による別会）において定期的に古医書の講書や校正を行ったことが分かる。また、芝藩邸内の医学寮でも時折「医談会」を開催している。

⑤「起居注（三）」では、森立之（立夫）の名がしばしば見え、この時期親交があったことが分かる。医学館（別会）における1・6の日の講書も継続しており、元治元年は11月6日から12月6日まで5回、慶応元年（4月7日改元）は正月23日の発会に続いて正月26日から12月6日まで38回、また12月24日には医学館で褒美を賜わり、慶応2年は正月23日の発会に続いて2月1日から7月6日まで21回の記録がある。瑣事ながら、このうち慶応2年の2月・6月・7月の記録は、別会講師の県玄節・稲葉文貞・佐藤元菫・森立之・橋宗俊が自ら記した講書記録『医学講習会日程』（上海図書館所蔵、拙稿『日本漢文学研究』1号

参照）とも符合する。

医学館における講書について敷衍すれば、毎3と8の日（3・8・13・18・23・28）、4と9の日（4・9・14・19・24・29）、5と10（5・10・15・20・25・30）の日に幕府医官向けの講座が開かれ、それぞれ4名程度の講師によって合計十数の医書が講じられた。これに加えて、天保14年以降、陪臣・町医を対象とした別会が増設され、毎1と6の日（1・6・11・16・21・26）、2と7の日（2・7・12・17・22・27）にそれぞれ3名の講師によって合計6種の医書が講じられた。前記のように元菫の出講は1・6の日に限られており、これは松江抽斎の講座を継承したものである。元菫とともに1・6の日に講師として出講した者は、稲葉文貞と県玄節（はじめ井岡友仙）であった。

元菫日記によって、1864年から1866年にかけて84回の出講記録が分かり、元菫が医学館別会講師として精勤している様子が確認できること、これが筆者にとって一つの収穫である。また、会津藩江戸屋敷内に元菫主導のもと医学寮が設けられ、正月発会における神農祭挙行や、講書や医談会が開かれていたことは、諸藩において江戸医学館に倣った医学教育施策が行われた実例として興味深い。

但し、毛を吹いて疵を求めるとくにして若干の私見を付け加えるならば、「医庠、診貞升并正藏女」（p.145、元治元年4月21日条）に、「医学館で診療に携わったことを示す」と注を加えているのは一考を要するかも知れない。拙稿「江戸医学館の臨床教育」（『日本医史学雑誌』59-1、2013年）に記したように、医学館において外来患者に対する診察と投薬を行うのは毎3と8の日が基本であり、毎月8日には「病人調べ」と呼ばれる世話役・世話役手伝・世話役手伝介による治療経過に関する判断が行われた。元菫が出講する1と6の日は診察・投薬の日ではない。また、診察と投薬を担当する者は、寄合・小普請など非職の幕府医官、および幕府医官の子弟であり、元菫のように別会講師を拜命していた諸藩医や町医はこれに与らなかったというのが筆者の見解である。確かに元菫の日記では「医庠講書」「医庠校正」など、

その日の活動内容を記している場合もあるが、単に「医庠」「医費」と記している場合も多く、「医庠」「医費」という記載だけで医学館で講書を行ったという意味に理解すべきであり、この日の診察は他所で行われたものであると思う。

次に筆者にとってやや意外であったのは、元菘と交流のあった医者拾ってみると、多紀元堅門人との交流が多いのは当然のこととして、その一方で嘉永・安政までの日記には森立之や渋江抽斎の名が見えないことである。これは筆者にとって一つの発見であり、またこれまで考えていたことへの示唆でもあった。そして渋江抽斎の名が見えないことが何を意味するかと言えば、抽斎と元菘の親疎と、それに附随して鷗外晩年の史伝『渋江抽斎』をどう考えるかという問題にも関わる。

筆者はかつて「西周日記」を解説する西周研究会に参加していた時、同会の主宰者である故中井義幸氏（『鷗外留学始末』岩波書店2010年刊の著者）から次のような趣旨のことを聞いた。鷗外が『渋江抽斎』の冒頭に抽斎のことを知らないように書いているのは鷗外一流のフィクションであり、鷗外は佐藤元菘から抽斎について聞いていたはずだ。『渋江抽斎』には不可解にも佐藤元菘の名前は出てこないが、『渋江抽斎』は鷗外が敬愛する師佐藤元菘へのオマージュとして書いたものではないかと。

『医心方』校刻作業が行われている嘉永末～安政中に、その事業の実務者である抽斎と元菘の間に交流があったと推定しても少しも不思議ではない。しかしながら、少なくとも現存分の日記の字面に一安政2年12月以降7年間分の元菘日記が失われていることは残念だが、渋江抽斎の名は見えないのである。抽斎の盟友というべき森立之の名も元治元年以降によりやく現れる。この事実は、伊澤蘭軒や狩谷掖斎に学んだ渋江抽斎や森立之と、多紀元堅およびその門人たちとの間に、当初から頻繁な交流があったのではなく、医学館において別会講義が始まって陪臣・町医が出席できるようになり、また安政年間の『医心方』校刻事

業に多くの人材が結集したことによってはじめて、医学館を核とした考証学派と称すべき集団が形成されたことを証しているように思われる。筆者が考えていたことへの示唆とはそういう意味である。

そこで、あらためて渋江抽斎と森鷗外をつなぐ人物としての佐藤元菘の役割をどう見るべきかが問題となってくる。差し当たり、元菘が抽斎とどれほどの交流があったかという事実関係の究明と、鷗外と元菘の師弟関係をその史伝の創作動機とともにどう評価するかといった点が問題になるであろう。また典型的な江戸詰藩医として生きた都会人で書斎人の抽斎や立之とは違い、会津生まれで藩領と結びつきが深く、千住や筑波をしばしば往還した元菘の個性も考慮されねばならないだろう。「日記」からは幕末維新期の元菘が医学館や藩邸での講学だけでなくかなりアクティブであったことが窺えるが、そうした元菘の動向が幕末政治史における会津藩の激動する状況といかなる関係にあるのかといった点は気になる所である。

本書は読者の関心によって、微視的な問題、巨視的な問題、さまざまな問題を考える資料になっていると思うので、多くの方々に勧めたい。本書刊行を機に、更なる資料発掘や多方面の研究者による研究の進捗が望まれる。なお、本書には日記本体（330頁）とは別に、人名、地名、書名、その他に関する補注が別冊（117頁）のかたちで附随しており、日記の理解に大いに役立つ。「調べる会」関係各位の十年にわたる努力に敬意と祝意を表するとともに、今後の活動に期待したい。

（町 泉寿郎）

[安藤昌益と千住宿の関係を調べる会 佐藤元菘日記解説班、〒123-0852 東京都足立区関原2-14-20-105, 歴史春秋社、〒965-0842 福島県会津若松市門田町中野大道東8-1, TEL. 0242 (26) 6567, 2020年4月, A5判330頁, 別冊117頁, 定価4,500円+税]